

## 池田見聞録

---

### ○犀竜民話と川会神社

#### 泉小太郎のふるさと池田十日市場・川会神社

犀龍民話の主人公“泉小太郎”と十日市場の川会神社とは深い関係があります。江戸時代松本藩が編さんした信府統記によると・・・

約2000年前松本地方の大きな湖に犀竜（諏訪大明神の変身）、東高梨の池には白竜王（日輪の精霊）が住んでいました。その子供が小太郎。小太郎は犀竜の背に乗り山清路の巨岩を突き破り千曲川から越後の海まで乗り込み湖は水が引き、陸となり松本平ができました。

その後、小太郎は有明の里、今の十日市場の川会というところに館を建てて住み、子孫は大いに繁昌しました。歳月が流れ小太郎は「私は鉢伏権現の生まれ変わりであり、この里を神護する」といって犀竜、白竜王と同様仏崎の岩穴に隠れました。人々は川会大明神の社を建て、小太郎を祀りました。…………

平成18年、十日市場の皆さんにより、犀龍民話と川会神社の関係を記載した標柱が川会神社のまわりに設置され、平成28年3月21日、「泉小太郎」のレリーフ像が川会神社に設置されました。これを機会に郷土の誇り“泉小太郎と十日市場・川会神社”を大いに知らしめていきたいと思えます。

### ○身代り地藏尊

#### 渋田見新屋敷の「身代り地藏尊」

仁科一族の豪族「渋田見氏」の氏寺が渋田見の地藏堂の東北に「長生寺」という名刹がありました。天文年間に武田信玄の軍勢に攻撃を受け、寺は焼かれ石仏は四散しました。武田の兵士が住民に切りつけようとした時、地藏尊が表れ、身代りとなって防いでくれました。

昭和の初期、現地藏堂の下に住んでいた山本弥代吉さんの夢枕に地藏尊が現れ、畑に埋められているから掘り起こしてほしいとお告げがありました。地藏堂の下の畑を掘り起こしたところ、6体の地藏尊が発掘され、お堂をたてて祀ったといわれています。霊験あらたかな「お地藏様」として話題となり、多くの参拝者が訪れたと言われています。今でも毎年4月末に地域の人たちにより祭りが続けられています。

### ○坂上田村麻呂

#### 池田と田村麻呂との関わり

田村麻呂は川会神社に陣し、勝利を祈念したところ、その神徳により鬼（八面大王）退治に成功できたことに感銘し、社殿を改築したといわれています。また、滝沢神社の東に巨大な石を積み上げた井戸があり、「おたね池」と言われていた。ここに田村麻呂はしめ縄（七五三縄）を張り、その水で身を清めたともいわれています。七五三縄は神聖な場所を示す事に用いられることであり、「七五三掛（しめかけ）」という地名も田村麻呂と関係があるかもしれません。

なお、田村麻呂は陸郷の樹玉（こだま）神社で2つの石を奉納し有明山の神に勝利を祈願したという地域の言い伝えがあり、七五三掛の清水で身を清め、川会神社に陣したという説もあります。また、八面大王については、次のような説もあります（坂本博著「信濃安曇族の残骸を復元する」より）。…………

八面大王は安曇族の首領であった。安曇族は九州の磐井の乱（528年）に敗れ、北九州から糸魚川をとおり、この地に逃げて来て、地域の支配者となった。しかし、後からこの地に入って来た仁科氏が田村麻呂の力を借りて安曇族を滅ぼした。仁科氏は安曇族を抹殺するため八面大王を悪人説の物語を作りあげた。しかし、安曇野、有明山などの地名までは抹殺できなかった。…………

## ○東大寺正倉院の麻袴（あさばかま）と池田

### 奈良の都との交流していた池田町

池田町中之郷の東山段丘上にある四神社は奈良時代前科（さきしな）郷開発の祖神として奉祝されていたと伝えられています。東大寺正倉院には天平時代、安曇郡前科（さきしな）郷戸主安曇部真羊が作成したと墨書された麻袴が現存しています。前科郷は明科～大町南部の東山丘陵地帯を指し、池田周辺で作りだされた麻袴が朝廷に献上されていたことを示しています。池田は古代から産業が発展し、奈良の都とも交流があったのです。四神社はかつて県道51号線沿いにあり、「田中の宮」と呼ばれていたが、昭和51年の圃場整備で集落を見はらす中之郷の二十五社との合殿（四柱社）になりました。左殿が四神社で、右殿が二十五社です。

## ○行基菩薩（上人）作と言われている体内仏のある中乃郷観音堂の十一面観音立像

池田町中乃郷の観音堂に安置されている木造の十一面観音立像の体内仏は行基菩薩（上人）の作と言われています。十一面観音立像は鶴山東山段丘の四神社の北隣りにあった松林寺の観音堂に安置されていましたが、明治の廃仏棄釈の際、内川に捨てられましたが、部落の人が拾いあげ、中乃郷の観音堂に安置されたと言われています。

行基菩薩（上人）は奈良聖武天皇の時代、仏教を広め、貧民救済、土木技術（溜池造成・開湯＝作並、草津、野沢、渋、湯田中、鹿教湯など）集団で全国をまわり、東大寺の大仏建立にも力を尽くし、仏教界最高位の大僧正に任じられた人です。奈良時代、「麻袴」を平城京に送り、前科郷の中心地であったと言われている中乃郷に行基菩薩（上人）の集団が立ち寄り、体内仏を制作したとしても不思議はないと思います。

## ○お寺の伝説

### 長福寺 信念を貫いた和尚さん

江戸時代、花見神社の東側に堺山長福寺という禅寺がありましたが、廃寺になってしまいました。その所以（ゆえん）は次のとおりです。

江戸時代、松本藩主水野忠職（ただもと）が花見の山でタカ狩りをしていました。1羽のキジが長福寺へ逃げ込んでしまい、捕まえようと境内に入ったところ、長福寺の和尚さんは「境内での殺生を許さぬ」と境内に入ることをこぼみしました。藩主は怒り、「自分の領地に一步も入るな」と寺の周りに厳重な垣根をつくり和尚さんの出入りを禁止してしまい、和尚さんは寺を去ったので長福寺は廃寺となってしまいました。廃寺となったとはいえ、信念を貫いた和尚さんは池田の誇りです。

## ○池田義民の「久兵衛」さんのお話し

義民伝とは、封建領主の厳しい年貢の取立てに抗議して一揆を起こした農民の話です。千葉県佐倉宗五郎、松本平の農民1万人が連帯した貞享一揆（1686年）の多田嘉助（安曇野市中萱）は有名です。しかし、池田町にも立派な義民伝があったのです。今回は、林中の義民「久兵衛」伝をや仁科宗一郎先生の「信濃池田町史話」を参考に紹介します。 . . . . .

江戸時代、林中に久兵衛と言う豪農がおりました。彼は大変な働き者で徳もあり、林中の荒地を開墾し、久兵衛分と呼ばれた広い新田を開拓しました。時の領主もその功績を認め、久兵衛さんの屋敷の税金の一部を減免したと言われています。慶安年間（1648～1651年）、時の松本藩主（水野忠職）が農地の検地を行いました。林中の新田は高瀬川の砂礫地だったため、地質が低く収量は低かったのですが、奉行は他所と同等の地質としてしました。つまり、米の収量は低いにもかかわらず、収量の多い田と同じ年貢米を出せと言うのです。この不当な措置に林中の農民の怒りは強

く、久兵衛は皆を代表して奉行と激論し、思わず無礼な振る舞いをしてしまいました。久兵衛は捕らえられるのを恐れ、池田・会染・松川の入会地だった松川の馬羅尾（ばろう）の山中に隠れました。奉行は非を認め、農民の要求を容れて地質を低くしました。また、久兵衛も捕らえられませんが、馬羅尾の山中で暮らし終焉しました。林中の人々は久兵衛親子の人徳を讃え、馬羅尾に祠を建て、「信の宮（信の権現）」として祀り、毎年、春と秋にお祭りをしています。それが 300 年以上たった今でも続けられています。・・・

佐倉宗五郎や多田嘉助のような痛ましい結末ではなくとも、わが身も省みず主張した「久兵衛」さんの行動も立派な義民伝であり、池田町の誇りと言えます。

### ○**渋田見 諏訪神社本殿の彫り物と池田町の宮大工「平林金四郎」**

渋田見 諏訪神社本殿の彫り物（獅子、猿、海馬、兎、瓢箪、鶴、亀、松、竹、梅）は、文政 7 年（1824）岩原村（現、安曇野市堀金岩原）の大隅流と立川流の二つの流派を習得した優れた宮大工「立川政吉」の作で、町の指定文化財となっています。彼の作品は安曇野市から小谷村までの多くの神社（松川村細野 諏訪神社本殿、大町市 鹿島神社本殿など）に見られます。

上水内郡小川村高府出身で池田町三丁目の平林真助家の養子となった平林金四郎（1839～1913）さんも、立川流の宮大工で、生坂村東広津（宇留賀）の大日堂の彫り物は彼の作と言われ、生坂村の指定文化財となっています。

### ○**井口喜源治のご婦人は池田町の人だった。**

井口喜源治は明治 3 年穂高に生まれた。穂高の高等小学校の教員をしていましたが、相馬愛蔵（新宿中村屋創業者）らと芸子置屋設置反対運動で校長や一部同僚教員の排斥にあい、退職を決断。私塾「研成義塾」を創立した。「良き人（品性のある人）になれ」の教育方針のもと、明治 31 年から昭和 13 年までの 42 年間に、荻原守衛（彫刻家）、清沢冽（外交評論家）、東條たかし（ワシントン靴店創始者）、斉藤茂（野の哲人）など多くの著名人を輩出させました。その喜源治を支えたご婦人が池田会染の内山定次さんの次女「内山きくの」だったのです。7 男 3 女をもうけ、貧しく苦しいなか大変苦勞されたと言われています。井口喜源治のご婦人も池田町の誇りです。

### ○**童謡作詞家「浅原六朗」さん・「藤森秀夫」さんは池田町で育ちました。**

#### **郷土の誇り 2 人の童謡作詞者**

童謡「めえめえ児山羊」は日本詩壇の最高峰として活躍された作詞家「藤森秀夫」先生の作品です。先生は 1894 年（明治 27 年）に、安曇野市豊科新田の医師藤森予八郎氏の長男として生まれたことになっていますが、出生当時、藤森予八郎氏は池田町で医師をしており、実際には池田町で誕生し、6 歳までそこで育ち、7 歳頃に池田から豊科に移ったとの事です。

池田町には「めえめえ児山羊」の藤森秀夫先生、「てるてる坊主」の浅原六朗先生の二人の偉大な童謡作詞家の故郷だったのです。これも郷土の誇りと言えましょう。

### ○**歌人「岡 麓（ふもと）」と池田**

明治から昭和にかけてアララギ派の重鎮として活躍した岡 麓（ふもと）。麓の歌風は、「万葉集」に本質を置いた歌に、子規直伝の写生を理論的に吹きこんだもので、都会的に洗練された典雅な歌と評されています。

麓は第二次世界大戦の戦火をのがれるため、昭和 20 年 5 月（68 歳）に歌人小谷計雄（大雪渓株

式会社先代社長薄井計雄氏)の援助のもと、内鎌の仮寓に移り住みました。これには、子規の教え「都会生まれの者は一生に一度田舎住居をしてみなくてはダメだ」が影響していたと言われてい

ます。  
麓は町民に歌と書を教え、池田町・長野県の文化興隆に尽力されました。世間的な地位・名声など気にせず、歌と書で占められた一生でした。その遺徳を偲んで昭和55年、終焉の家を「内鎌草庵」として復元され、「湧井」の歌集にちなんで歌碑が建立されました。

「湧水の浅井の底のみえすきて 雨そそげども 濁らざりけり」がそれです。

「夏消えぬ 雪の高山 やや遠に しばしば見とも 常あかなくに」は渋田見八幡社の境内に、また、親交のあった4丁目の歌人桂川正雄氏邸(現、桂川印刷所)にも次の歌碑があります。

「家あるじ 折り炊く柴の 火移りを 湯に温まり おりつつぞ聞く」

桂川正雄氏は昭和32年の宮中で行われた歌会始めの詠進歌に見事入選(次の歌)されました。

「西原に 引き揚げ家族の 家建ちて ともしびの見え 牛の声する」(池田町公民館横に歌碑あり)  
桂川氏は「入選は岡先生のおかげである」としみじみと述べています。なお、麓の書は清酒「大雲溪」のラベル字として今も使われています。最後に麓の人となりを紹介します。お孫さんに言った言葉 「悪いことは悪い、良いことはよい、人間は正直になりなさい」

## ○年中行事 義塩伝承と飴市

### 新春の風物詩

毎年2月第1土、日には池田飴市です。商売繁盛の神様(市神様)を祀る拝殿が作られ、白装束の子供たちが市神様と共に町内を引きまわります。市神様の社殿は里神楽殿に似た念の入った流れ造りです。飴市の由来は次のとおりです。……

戦国時代武田信玄と上杉謙信が信濃を舞台に戦っていたころ、武田信玄と今川義元が戦争状態になり、今川義元は甲斐信州へ塩を送る事を止めてしまいました。

困った民衆を助けるため、上杉謙信公は「争うべきは矢にあり、米・塩にあらず」とし、糸魚川経由で塩を送り、松本に1569年1月11日に到着したといわれています。謙信公の徳を讃えるため塩市が始まり、何時しか飴市に変わったといわれています。……

1丁目、2丁目、4丁目、5丁目、吾妻町、東町の6町会は市神様を祀る拝殿をつくり、1・2・吾妻町は白装束の子供たちが市神様を山車に鎮座させ町内をひきまわります。なお、「牛つなぎ石」は本来、市神様がやって来て、その中に籠もる磐座(いわくら)といわれています。しかし、池田の「牛つなぎ石」は街道沿い水路の船をつないだ石とも言われています。

## ○池田町から見える雪形

### 誰もが絶賛する北アルプスの美しい連峰・雪形

池田町からは北アルプスの山並みが一望できます。寒い冬が終わり、春の音が聞こえ始めるころ、山々は季節の訪れを伝えてくれます。昔の人々は、爺ヶ岳の「北と南の種まき爺さん」(4月上旬~下旬)の雪形をみてお百姓をはじめたといわれています。

4月~6月、池田から白馬にかけて、青空のもと北アルプスの様々な雪形が楽しみ、爽やかな気分になります。雪形を紹介します。( )内は出現時期です。……

蝶ヶ岳の「黒い蝶(4月下旬)」と「白い蝶(6月中旬)」、常念岳の「常念坊(5月)」、東天井の「達磨(だるま、5月)」と「仔犬(6月)」、鹿島槍ヶ岳の「獅子と鶴(4月・5月)」、白馬岳の「雄馬(5月)」、小蓮華岳の「種まき爺さん・婆さん(5月)、仔馬(5月)」、白馬乗鞍岳の「鶏(5月)」、

なお、五竜岳の「武田菱（4月・5月）」は池田町からは見れません。．．．．．

## ○なまくら観音物語

### 横山拓衛さん作の 池田広津の野仏を題材にした貴重な創作民話

信州の山村に大変よくばりな人情のひとかけらもない地主がいました。

ある時、地主のところへ一人の男が転がり込んできて、下男や下女のいやがる仕事を引き受けて地主の前でゴロゴロして怠けて見せました。地主は“なま作”と名前をつけ、見回りのたびになま作を捕まえて叱りつけました。おかげで下男や下女はしかられず、“なま作”に感謝しました。

村で悪さをする犬を村人が川へ流し、かわいそうだと思ったなま作は犬を助けてあげました。しかし、甘やかされて育った犬は村人を困らせました。“なま作”は川へ流そうと犬を誘い出しましたが、犬は猛烈に抵抗し、“なま作”の左腕を噛みとってしまいました。家に戻ってきたときには、“なま作”は片腕のない観音の姿になっていました。地主は心をあらため、働いている人たちに田畑を等分しみんなで幸せに暮らしました。

この民話は碌山美術館に勤務していた横山拓衛さんの作です。横山さんは広津日陰の片腕のない小さな野仏（如意輪観音）をみて、この物語を創作したとされています。それ以来、野仏は「なまくら観音」と呼ばれるようになりました。なまくら観音は県道宇留賀池田線町営バス停日陰駅すぐそばのお堂に広津の皆さんにより保管・公開されています。

## ○正科 竈（かまど）神社の里神楽「岡崎踊り」

毎年9月の敬老の日および その前日は、正科の竈（かまど）神社のお祭りで「阿亀（おかめ）」面と「火男（ひよっこ）」面の2人による「岡崎踊り」（里神楽）が奉納されます。この踊りは町の民族芸能文化財に指定されており、踊りは次のような話に基づいて演じられていると正科で伝承されています。．．．．．

岡崎は江戸時代、東海道筋の宿場町・城下町として栄えた。この岡崎の遊里に、気立てが優しく絶世の美女と評判され、大名かたにも寵愛された遊女と庭掃きの丁稚奉公の醜男がいた。男は陰ひなたなく一生懸命に働いていた。ある日、男が遊女を一目見たとき、その美しさと気高さに圧倒され、見かけるたびに心ときめき、恋こがれ、求愛した。遊女も男の誠実な心にうたれ、好意をもつようになった。やがて、二人は一緒になり、岡崎の郊外に温かい家庭を設け、幸せな生活を送ったと言う。．．．．．

なお、「あづみ野 池田の民話」では、岡崎の遊女と下男は正科の源光寺に訪ねてきて寺に雇われ、岡崎の「五万石」踊りを伝えた。それが「岡崎踊り」となり、竈神社に奉納されたとしています。しかし、岡崎市にはそのような踊りは存在していないと言われています。

江戸里神楽には「岡崎」という演目があり、「阿亀（おかめ）」面と「火男（ひよっこ）」面の2人による踊りです（神奈川県茅ヶ崎の円蔵祭りで演じられている）。竈神社の岡崎踊りは江戸里神楽の影響を受け、「清らかな愛を、困難打ち勝って貰いた」夫婦の物語として踊りに表現したと思われます。

正科の「岡崎踊り」は花見の諏訪神社、滝沢の滝沢神社に伝えられ、両神社の秋祭りで今も奉納されています。しかし、3社の踊りは、それぞれ少しずつ異なります。

（池田町ガイドマスター 薄井氏より）